



# 立野

練馬区立立野小学校  
平成27年 3月号

<http://www.tateno-e.nerima-tky.ed.jp>

## 一隅を照らす

校長 岡本 昌子

毎年、正門近くの梅のつぼみが膨らみ始める頃になると、音楽室からは卒業式に歌う「旅立ちの歌」が聞こえ始め、図工室では卒業制作に取り組む6年生の姿を見かけます。今年もまた、義務教育の大きな節目に当たる卒業式で、立野小学校のリーダーとして活躍してきた子供たちを送り出す日が近づいてきました。今年の6年生も、よく学び、よく遊び、そして気持ちよく働く子供たちでした。たてわり活動では、低学年に優しく分かりやすく説明してあげるリーダーシップもありました。その6年生を送り出す「卒業式」という日は、学校にとっては、一番晴れがましく、そして一番寂しい日でもあります。

卒業式までの登校日は、あと18日となりました。3月の学校は、今までの感謝の気持ちを添えて6年生を送り出す準備を進める場であるとともに、どの学年も4月に進級する一つ上の学年をイメージして、学習のまとめに取り組む場でもあります。

この残りわずかとなった小学校生活を愛おしむように過ごす6年生の姿と、送り出す在校生のひたむきな姿は、私にいつもこの言葉を思い起こさせます。

それは、『一隅を照らす』という言葉です。この言葉は、平安時代に比叡山延暦寺を開き日本天台宗の宗祖である最澄の言葉です。この一隅とは、片隅という意味ではなく、「今、居るところ」という意味だそうです。ですから、「片隅の暗いところを照らす」というのではなく、『その場に必要なたる光を自らが発するようになれ』つまり、「その場にいなくてはならない人になれ」という意味です。この言葉は、最澄が著した『山家学生式』（さんげがくしょうしき）の冒頭部分に記載されています。

学校では、多くの子供たちが生活しています。一人一人の顔つきが違いうように、考え方や性格も違いますが、「自分の今居る場所で、自分の役割をしっかりと果たす、そのことが学級全体、学校全体の輝きになる。」という経験は、ぜひ全ての子供たちに積ませたいと考えています。

子供たちは、いずれ小学校を巣立って、新しい世界に進んで行きます。そこには、将来につながる価値ある学びや、一生忘れられない楽しいこともたくさんあることでしょう。けれども、その道は決して平坦な道だけではなく、山あり谷ありの道だと思います。当然、挫折も経験することでしょう。そのとき、「のせいでできなかった。」とか、「でなければできたのに...」というような言い訳をせず、その逆境をバネとしてたくましく生きてほしいのです。「一隅を照らす人になる」つまり、「自分自身が置かれたその場所で、役立つ人間になろう。」と精一杯努力することが、よき友を得、仲間と共感し、感動のある人生を創り出すことにつながるのだと思います。立野小学校の子供たちの真面目さや温かさは、幼いながらも常に「一隅を照らす」生き方を感じさせてくれました。

年度の終わりに当たり、保護者の皆様、地域の皆様には、本年度も本校の教育活動へ多大なるご理解とご支援を賜りましたことに、厚くお礼を申し上げます。